

私と文学・11
読書会

今年4月9日。仙台文学館友の会の読書会に参加した。テキストは遠藤周作の『父親』（集英社文庫）。父親と娘の関係性をめぐる家族の物語だ。やや分厚い本だが、平易な文章ですらすら読めた。読後感を胸に読書会に臨む。参加者は3名だったが、物語が身近に感じられることもあり、ときに我が身に引き寄せながら和やかに語り合った。

以前読んだ遠藤周作の『影に対して』（新潮社）。これも家族の物語だが、こちらは父親と遠藤とのわだかまりを描いた私小説。『父親』とは受ける印象がだいぶ違うが、読み合っているうちに、どちらも「人間の底に潜む弱さ」と向き合った作品では？。そんな思いにかられ、遠藤文学に今少し触れてみたくなった。

早速、読書会からの帰り、図書館に立ち寄り、「白い人・黄色い人」「沈黙」「海と毒薬」を借りた。どれも重厚な作品で

感銘深く読んだ。波及効果だろうか、読書会の後、こうして他の作品を読むことがよくある。何か読書の幅が広がるような気がしてくるのだが。

話はテキスト『父親』に戻る。不倫している娘を、父親は「けじめ」という言葉でしきりに説教する。しかし、娘は反抗的な態度をとり、改めようとしなない。悲嘆にくれる父親。参加者から「父親の寂しさ、哀しみの描き方がすごくうまい。さすがは小説家」との発言があり、文中のその一部を見てみた。「なるほど、たしかに」うなずかされ、文章表現の巧みに、改めて気づかされた。

読書会について、個人的な感想等を若干述べてみた。肩ひじ張らず気軽に参加でき、私にとっては読書の楽しさを知る、いい機会になっていた。ただ、一人で喋りすぎるくらいがあり、気をつけなければ、と思う。

「私と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

前があると聞いて驚いた。20年ほど前には百キロ婆さんと呼ばれていたそうだが、いま若者に人気の漫画ではターボババアと名付けられている。お婆さんの足の早さは時代や技術を反映して変化していくのだろうか。

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

文学の杜
仙台文学館
友の会会報
第78号
令和7年7月20日発行

文学館友の会総会

2025年度がはじまりました



大型連休の最終日5月6日、雨上りの爽やかな新緑に包まれた仙台文学館で文学館友の会の2025年度総会が行われた。渡辺祥子会長の挨拶に続き、事務局伊藤美菜子さんの司会、会長の議長で議事が進められた。

2024年度の実業内容とそれに伴う収支決算、特別会計の収支決算が事務局から報告され、続いて会計監査から適切処理との報告があった。

最後に質問が出された。「一般会計の研修費の支出が無く、特別会計からイベント出演謝礼が出ているのはなぜか」というものだった。これには事務局から「一般会計の収支に表れているように、会員からの会費収入は、ほぼ会報の印刷費と会員への通信費に当てられている状態である。従って行事の謝礼や周年記念のカラー会報の発行、記念行事などを特別会計から支出することになる」との説明が有り、了承された。出席者は14名。

▽会長 渡辺祥子 ▽副会長 寺嶋信
▽幹事 一文字ひろみ ▽監事 近田裕子、長沼和子 ▽サポーター 池田ミチ、尾形光子、加藤裕子、佐藤満子、佐野のぶ ▽事務局 伊藤美菜子

総会終了後、特別展示「詩人・山村暮鳥展」担当の本多学芸員から展示解説と展示室での案内があった。40歳で亡くなった詩人の膨大な作品に圧倒された。

風と歩こう

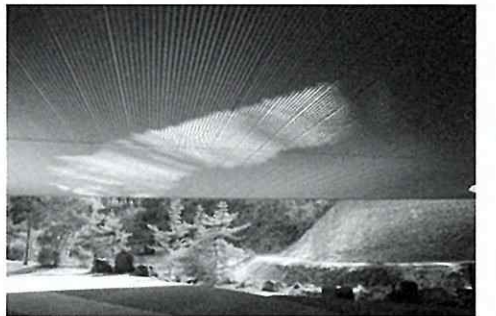


Photo by Ryuji Sasaki

梅雨の晴れ間、新調した日傘のさし初めにうつつけの空だ。文学館1階のエントランスロビーへのアプローチは、ゆるゆるとした登り坂、傘をかしげて空を見上げたり木漏れ日を踏んでみたりする。鯉の泳ぐ小川は、力強い光を反射して、軒下に揺めく光の影を映す。

もうすぐ梅雨が明け、子供たちの夏休みが始まる。今年はこちらが早いだろうか。そのころ『銭天堂』が文学館にやってくる。この不思議な駄菓子屋には幸運な人しかたどり着けないという。望みを叶えてくれる駄菓子、でも望みが叶うかどうかは使い方次第、その人次第だ。そんな物語に、子供たちは何を思うのだろうか。一度は出会いたい、でも少し怖い『銭天堂』で何を買おうか。買わないで帰ろうか。どんな駄菓子があるのか。物語を読んで、ワクワクより少し複雑な面白さを楽しむのだろうか。

きっと子供たちの明るい声が吹き抜ける空間に響くことだろう。この夏は、そこに何かを相談するようなヒソヒソ声がかかるかもしれない。

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話 022（271）3020
仙台文学館のホームページ
<https://www.sendai-lit.jp/>

文学とともに

今、出来ることを

会の役割として

会長 渡辺 祥子

日頃の友の会活動へのご支援に、心から感謝申し上げます。

文学館の開館とともに歩んできた友の会の活動も27年目。その時代時代で活動のスタイルも随分と変化してきました。

かつては大型バスをチャーターして各地に出かけた見学会も、ご自身の体調やご家族の介護などのために遠出ができないとの会員の方々からの声を受け、午前中だけのイベントを企画したり、今一度足元を見直そうと、文学館の中庭や常設展を味わう企画も実施。また在宅を余儀なくされたコロナ禍がきっかけで始まった、会報をひとつの交流の場と考えてのアプローチ（毎年1回、テーマを決めて皆様の声を寄せて頂く）など、縮小せざるを得ない状況を逆手にとった新たな価値の創造に力を入れて参りました。

新年度も「文学とともに」をテーマに、様々な状況にいらっしやる会員お一人お一人が何らかの形で参画できる友の会であるよう心を砕いて参ります。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第78号をお届けします。

▽朝倉かすみの「よむ よむ かたる」を読んだ。読書会に集う超高齢者6人の人生の機微がユーモラスに書いてあった。朗読はしないが自分の読書会7人に引き寄せてみる。会の様子がびったりそのもの。後半はびつくりな展開になっていた。さすが直木賞候補になったのもうなずける。みんなで回し読みした。（一）

▽日本人の主食の米が店から消えた。あっても異常な値上がりぶり。「米は買わない。もうらう」といった大臣が辞め、新大臣は国民の不安払拭の為備蓄米を放出するといった。備蓄米いわゆる古古古米に古がもう一つ？。加わると、動物の餌にする決まりという事実を、有力政治家の発言で知った。農政に無知な自分を猛省した。（近）

▽多賀城市立図書館に行ってみた。なるほど話題になるはずだ。1階はカフェと本屋、2階には有料のラウンジがある。3階にある学習室は予約が可能だ。全体的に使い勝手がよさそうだ。版元完売で手に入られなかった本をみつけ、読書スペースで読みふけた。次は仙石線に乗って行こうと思う。（和）

▽バス停でバスを待つあいだ、目の前を通り過ぎる車のナンバーに目が行った。「999」というのがあった。クククと笑っている。しばらくすると「666」が来た。ムムムとこらえている。こんな偶然があるのかと驚き、次は何かつい目を凝らすが見つからないうちにバスが来てしまった。（佐）

文友一滴

有名無名、日本だけではなく半分は国外のヒロインも登場させている。それぞれのヒロインが置かれたその場で懸命に生きた姿を知ってもらうことに主眼を置いたという。◎は小説のヒロイン。●は実在のヒロインとしているのも分かりやすい。また順番は日本と国外を交互に並べてあるのもめずらしい。一人につき2〜3ページの紙数で書いてあり、いつでも事典のように読めるのもいい。その中で7ページにわたって書いてある「戦争、もう一つの犠牲者たち」に目が止まった。戦後の売春婦たちをヒロインとして取り上げた著者の思いに心をはせた。

近頃は借りる本や買う本を少なくして精読になつていた本をゆつくり、じっくり読んでいます。（一）

出会いと発見

常設展 宮城の杜の文人

文学館の常設展示室をじっくり眺めていると、思いがけない「めっけもの」に出会います。友の会会報編集担当の4人がお気に入りの場面をご紹介します。

小池先生の短歌の垂れ幕

短歌が気になっていたが作ったことはない。コロナ禍で何もかもお休みになり塾居を余儀なくされた。この際独学でやってみようと初心者向けの本を周りにおいてみたが自分の力ではどうにもならない。小池先生の講座で学ぶことにした。するとどうだろう。常設展示の短歌の垂れ幕が目にとまるのだ。「新人作家と新刊コーナー」の前に腰かけてじっくり短歌を読み込む。誰もいない時は小さい声を出して読んだりする。座ってみると左側の4番目の歌は「思川の岸辺」から思川の岸辺を歩く夕べあり幸うすかりしきみをおもひて



この歌は特に胸に響く。好きな歌は暗唱できるまでになる。思川なんて実在するのかしら？ ありました。星野富弘美術館にいくときに乗った電車両毛線に「思川駅」があった。ここの川が思川。なんて素敵な川の名前。この時以来川の名前や橋の名前が気になりだした。小池先生の歌がぐつと近くになり、常設展示室に入る回数も多くなった。(一)

作家の文字に耳を澄ます

和紙を通す柔らかな光が、トンネルのような気配を見せる廊下を通り抜ければ、そこは宮城、仙台にゆかりの文学者が集まる常設の展示室。静かな室内で、今日は作家の直筆文字に目をこらす。「文字は人なり」と言われるが、誰ひとりとして同じ文字は無く、それぞれがそれぞれの個性を持ち、独特の味わいがある。「こういう字を書く人だったのか」と知られることもあり、時間を忘れて見入ってしまう。

井上ひさし、少し丸みを帯びた読みやすい文字に優しさが見える。向田邦子、力強くさっぱりとした文章とは違っていて、くっきりとした文字が意外である。北杜夫、東北大学時代のノートは細かい字でびっしり、神経質そう。小池真理子、流れるように美しく女性的な文字だ。熊谷達也、教師という職業だったからか、きっちりとした印象。佐伯一麦、作家になる前の文字は繊細で小さめ、いつから現在

のような独特の角ばった字に変わったのかと知りたくなる。伊坂幸太郎、自筆文字の展示が無い。それがかえってどんな文字を書くのだろうと想像する気持をかきたてる。

ひっそりと作家の文字を追っている、そこから小さな囁きが聴こえたような気がした午後の展示室である。(佐)

木製椅子と地図

この頃、常設展示室で私が足を止めて眺めてしまう所がふたつある。一つは、井上ひさしコーナーを過ぎた辺りで見えてくる木製の椅子。はき古しにみえるズボンが無造作に椅子に掛かっていて、座面にはそれ以上積んだら倒れてしまいそうな状態で本が積まれている。椅子の前足に沿って垂れさがるズボンの二本脚、その脱力感がたましい。この図には見覚えがある。本棚の整理をしていて行き場が決まらない本たちを一時仮置きする状態そのままだから。読書はラフでいい、と言ってくれている気もする。内心にやりとりしてしまいう演出に拍手したくなる。

もう一つは、作家ゆかりの場所を記した仙台市内の大地図である。かの魯迅や北杜夫、宮沢賢治等々の仙台エピソードはよく聞くと、次々新発見も加わっているようだが、最近私が注目しているのは、向田邦子の家族が父の転勤で住んだ所。邦子は弟と東京に留まったが、休みには

仙台に来たそう。住所は琵琶首丁で、現在の大手町だと聞いたことがある。ならば坂の多いこの辺りの道も通ったかもと、霊屋下の信号待ちではつい脇見をしようの。見慣れた仙台の町が、急に特別な陰影を帯びた景色にみえてくるという楽しみを、この地図のおかげで体験している。(近)

ひと休みのテーブルで

展示をじっくりと見て回る。少しくたびれて連れを探すと、新刊コーナーのテーブルで次々と本を開いている。飽きてしまったのかと隣に腰を下ろすと「面白いな、それぞれ装丁が違う」と当たり前のことを言う。何を今更と手元を覗くと、同じくらいの厚さと大きさの本を広げて「どちらが読みやすいと思う」と聞かれた。そんな視点で本を見たのは初めてだ。

この本のテーブル、仙台ゆかりの作家がこんなにいるのかと思ったり、新刊が出たのかと見るだけで、手に取ることはなかった。最近の表紙は色使いや雰囲気、似ているとか、本屋の本棚なら個性を発揮するのだろうかと思ったりして、眺めるだけだった。しかし、開いてみて驚いた。活字の大きさ、スタイル、上下の空き具合、もちろん紙の色や質感まで、当たり前だが一冊ごとに違いがある。

図書館や本屋で本を手にとるときには目的や必要がある。だから表紙や活字にはあまり目がいけない。でも、このテーブルでなら自分の好みの装丁をみつけることができる。こんな本の楽しみ方もあったのだ。(和)

第67回読書会

父親の情愛と娘の愛のかたち

遠藤周作『父親』

通常は短編小説をテキストにしている読書会だが、今回は久しぶりに長編小説を読み合った。

開発担当の部長として化粧品会社で働く56歳の石井は、部下にも家族にも「はじめ」の大切さを説いて来た。妻と会社員の娘、大学生の息子と暮らす自分の家庭は幸せだと感じている。しかし、中高年男性のスタイリストとして働く娘の純子は、顧客の1人から強引な誘いを受け、妻子あるその人物に惹かれるようになって行く。

て行く。

父親の娘を思う複雑な心情の揺れる様や、不倫相手の男の本質がその時々ではと描きほどみごとに描き出され、作者の人間観察の鋭さと描写力のすごさを見る。

- * 高度経済成長期が舞台だ。世代の価値観の違いも見られる。
- * 久々に恋愛小説を読んだ。
- * 何度も出て来る「はじめ」は古い父親を表している。
- * 生活用品からその時代が見えて来る。
- * 全てが終わった後の純子の割りきりの良さが爽やかだ。
- 4月9日 3名出席。(佐)

第68回読書会

日常に流れる時間の語るもの

佐伯一麦「青葉木菟」

構成になっっている。
* 私小説としてではなく、普通の小説として読んだ。
* 自然への姿勢が見える。

- * 詩、散文のような文章と思った。
- * 息子と父親のメッセージのやり取りが感じられた。
- * 慌ただしい日々、ゆつくり本を読みたいという気持ちになった。
- 6月11日 5名出席。(佐)

次回読書会は10月8日(木)14時
芥川龍之介「秋」(新潮文庫、文春文庫等所収)
※友の会会員は自由に参加できます。
申込みは友の会事務局まで。

向暑の文学館のそこここで

第28回ことばの祭典

短歌・俳句・川柳へのいざない

6月28日土曜日、仙台文学館で恒例のイベント「ことばの祭典」が開催されました。このイベントは部門の垣根がなく、参加者はどの部門にも一作品応募できます。このような開催形式は全国的にも珍しいということです。友の会は、応募用紙の配布と作品受付のお手伝いをしました。

梅雨明け直後のような暑さのなか、来館した参加者は冷房の効いた館内にホッと一息ついた様子でした。お題発表と受付開始の10時が近づくと、2階フロアには、緊張と期待と高揚のさざ波が広がっていました。

お題は「線」もしくは「濡れる」、締め切りは11時30分です。それまで参加者は文学館のそこそこで、友人や仲間と、あるいは一人で創作に励みます。館内の温度がほんの少し上昇し、ざわめきが消えて、台原で鳴く鳥の声が受付のテーブルまで聞こえてきました。作品応募後は、入賞作品の発表と講評を待つばかり。楽しい昼食の時間は参加者の力みが緩んでいくようです。レストラン「ひざしの杜」特製弁当は今年も人気がありました。参加者は百名、今年も若い人の参加が多かったのは嬉しいことでした。熟練者と若い人、それぞれが刺激を受け合った

